

週日の説教

金 大烈 神父 2009年2月24日(火)

《主に仕えるつもりなら、自らを試練に向けて備えよ》

イエス様がついてくるように呼びかけられた時、「この人についていけばたぶん死ぬことになるだろう」と弟子達が思ったならば、ついては行かなかったでしょう。わざわざついていく必要はないですよ。呼びかけられたときに、「この人には希望を置けるのではないか」「この人について行けば今まで感じられなかった世界に入れるのではないか」と、いろいろな希望を感じたからついていったのではないのでしょうか。

しかし、時間が経つとイエス様は、「いつか大祭司や律法学者達などの偉い人たちに引き渡されて死刑にされ、三日後に復活する。」とおっしゃるようになりました。弟子達にはその言葉の意味が分からなかった、と聖書のあちこちに書かれています。

もし、私たちが殉教の時代、迫害の時代に生まれていたら、信仰を持つか持たないかを今の時代よりずっと緊張感や切実感を持って考えていたと思います。ある意味では、私たちはとても幸せです。あまり怖い思いをしなくても信仰の生活ができます。迫害の時代の信者は、信仰を持つために命をかけるくらいの非常に強い緊張感と恐れを感じていました。しかし、結局は一番素晴らしいものを得られたのだと思います。今の時代の信者である私たちはとても幸せですが、その反面、必要な緊張感や懇切感もなくなってしまい、自分が何を望んでいるかさえわからなくなっているのではないのでしょうか。

ある意味では、迫害時代の人々のほうが今の時代の人々よりも信仰を持ちやすい時代に住んでいたのかもしれない。

ですから皆様、今日の福音(マルコ9:30-37)をとおして私たちがもう一度考えなければならないことは、「緊張感が必要だ」ということです。「何を望んでいるのか」「この望みがかなえられるために何をすべきか」を意識する、そういう状況を作らなければならないと思います。

今日、第一朗読(シラ2:1-11)でもきれいな話が出ていますよね。

「子よ、主に仕えるつもりなら、自らを試練に向けて備えよ。」

もちろん、妨げるものがない環境でよいことができれば、それが最高だと思います。しかし、歴史を考えてみても、本当によいことをしようとすれば必ずその反対勢力のいたずらが起こります。それを私たちは意識しなければならないと思います。皆様が信仰的に具体的に求めようとすれば、それを妨げる勢力が必ず表れます。

その時にどのような態度を見せるべきかをよく考えて、祈りながら乗り越えなければならないことをこの今日の第一朗読、そして福音をとおして考えてみましょう。

ありがとうございました。